紀南教会瓦版

発行元
紀南ｷﾘｽﾄ教会
紀南教会瓦版編集委員
和歌山県田辺市
下屋敷町８０
TEL/EAX
0739-25-1191

信仰の遺産

日本で一番大きな湖畔で家族と生活するようになって四年が過ぎた。今の私は湖畔をこよなく愛したヴォーリズ（一柳米来留）夫妻が晩年を過ごした建物を事務所として、公益財団法人の運営に携わっている。

全国各地からヴォーリズの建築や志(信仰)のルーツをたずねて彼のファンが私の事務所でもある一柳（ヴォーリズ)記念館を訪れる。キリストへの信仰を持つ者はもちろん、持たない者にもヴォーリズの生涯は魅力的に映るようである。

ヴォーリズは、十九世紀末から二十世紀初頭のＹＭＣＡ運動に多くの影響を受けて、一信徒として海外伝道を志し、琵琶湖の湖畔に導かれた。

ミッションボードを持たない彼は、自給自足を余儀なくされるが、貢献を目的とする事業を仲間と興し、また内外からの支援者により支えられ近江ミッションを展開する。いつしか、信徒伝道者ヴォーリズは日本の外国人の中ではかなりの有名人となっていた。

夏の軽井沢が彼らの休息と憩い、そして情報交換の場であったことはよく知られているが、そこでのヴォーリズとの出会いをビビアン・レモン師が「ビビアンの宝物」に書かれていることに驚いた。(レモン師がヴォーリズのオルガン伴奏でバイオリンを弾いたことが書かれている）そんなご縁なのか、一九五五年に紀南で開催された宣教師大会にレモン師はヴォーリズを講師として招こうとされたようだ。残念ながら、それはかなわなかったは、ヴォーリズはレモン師に大会で読み上げるようにメッセージを贈られた。その原稿タイプが私の手元にあるのだ！

その三十年以上前の一九二二年の「マスタード・シード」(近江ミッションの海外向けレポート雑誌）には四谷ミッションとカンニングハム宣教師の事が詳しく紹介されている。四谷ミッションはヴォーリズたちに教会堂の設計を依頼したのだ。

にわかなヴォーリズブームの中、今年はヴォーリズ召天五十年の記念イヤーである。その企画を市民の方々と開催する立場に置かれている私は幸いだと思っている。すべてに無駄がない。神の創造がなければ、イエスの福音がなければ、紀南基督教会もレモン師もヴォーリズも、そして私もここにはいない。

ブッシュマン

Ｓ子ちゃんと私

Ｓ子ちゃんと私は、小学生時代からの友達です。私自身は良く覚えていないのですが、私はＳ子ちゃんを日曜学校に誘ったのだそうです。ある時、そこで小さなカードをもらいました。そこには「いつも喜んでいなさい」と書いてありました。“そんなことならかんたんよ！”当時の私は、そう思いました。

中学校になる頃、私は家族と共に田辺を離れ、関東に移りました。学校はミッションスクールでしたから、そこでまた、この聖句を目にしました。生意気ざかりの私は、「いつも喜んでいるなんて、馬鹿みたい・・・。」と思ったりもしました。額にしわを寄せて、人生を悩む人をかっこいい、と思っていたのかも知れません。

それから何十年も経ちました。私も、それなりの試練や経験を与えられ、ある日ふと、あの言葉を思い出したのです。“いつも喜んでいなさい”ということは、辛い時でも、苦しい時でも、悲しい時でも喜んでいなさいということなのですか？これは、ハードルが高いなぁ・・・。その頃Ｓ子ちゃんが私の住所を探し出して連絡をくれました。懐かしいＳ子ちゃんとまた交流が始まりました。彼女は若い時に大病をされ、幾度も手術をし、入退院をされてきたことを知りました。そして今は病いを抱えつつ、教会員として活躍されているのです。驚いたことに、彼女はどんなに辛い時でも激痛のさいちゅうでも、明るいのです。電話でもメールでも、必ず笑ってしまう一言を入れてきます。医師のユーモラスな言葉や看護師さんの優しさも知らせてくれます。そして私の体調を気遣ってくれるのです。彼女は長い闘病生活から、多くのことを学ばれなのでしょう、そこで『いつも喜んでいる』強さも、培われたのでしょう。私はＳ子ちゃんと出逢えたこと、この聖句を思い出したことに、深く感謝しています。

ウィッシュ

光に照らされる時、だれもが神を敬い、父母を敬う思いを与えられるのである。

創世記には人間は神のかたちに創造された、とある。つまり、人間は親を慕い、親を敬い、親を大切にすることが、心に刻まれている、ということだ。なのにそれとは裏腹に、なぜこんなにも多くに人が親を罵り、親を軽んじるのだろうか。私たちに両親の非を裁くことが出きるのか。何故、こんな者に生んだのか、両親を恨み、神を呪う人もいるかもしれません。そうしたい人はそうすればいい。わたしもそうした。

誰も意味無く生まれてくる人は一人もいない。神の御心の内に生まれてくる。神のかたちに、神に愛されて生まれてくる。しかし、悲しいかなこの世は神を信じない罪の世です。その中で私達は皆、罪の影響を受け、罪に苦しみます。本来あるべき姿を慕いながらも、かけ離れていく自分の姿を知るのです。まじめに良い人間になろうと努力する人もいるでしょうし、いや人間てこんなもんだ、とあきらめ開き直る人もいるでしょう。

しかし、依然として私達の中の罪は消えることはありません。罪は私達に様々な不幸をもたらします。両親を恨み、責任を転嫁し、裁き、赦さない、赦せない、それは隣人にも及び、私達に惨めな人生を送らせるのです。

神はそんなわたしたちを深く憐れんで、御子イエス・キリストをこの世に遣わされたのです。完全な神として、また完全な罪のない人間としてイエス・キリストはこの世に来られたのです。そしてキリストはその生涯を通して、私達が本来、神の前にあるべき姿を示し、また誰もがそうなれるように道を作ってくださいました。

キリストは私達の一切の罪を背負い、自らの命と引き替えに、十字架で私達の罪の赦しを成し遂げて下さいました。私たちが罪多き欠けだらけの者でありながらも、また不十分な者であるにもかかわらず、このキリストへの信仰によって、実にそのままで受け入れられ、赦され、愛されていることを知るのです。

そこから「父母を敬う」思いが徐々に湧き上がってくるのです。隣人への愛が生まれてくるのです。まず、私達は神の前に罪人である自分を知り、キリストにおける神の赦しを信じる信仰を与えられねばなりません。これは誰もが無条件で受けることのできるものです。そこには何の差別もありません。神の恵みの賜物です。

以前、ヴォーリズの本を読み心が篤くなった。今、Ｓ子ちゃんを読み心が温かくなった。主に感謝。次号四二号は八月三一日です。

☆あなたの父と母を敬いなさい☆

紀南教会　上山耕司

現代は核家族化が進み、生活は豊かになっているが、父母を敬い、大切にするということがますます少なくなって、心は貧しくなってきている。子は親の姿を見て育つという。親の父母（おじいさん、おばあさん）に対する姿勢が子供に反映し、それが自分に返って来ているのだろうか。しかし、これは現代に限ったことではない。いつの時代にも当たり前の、しかも最も大切なことが、繰り返し叫ばれ、戒められながらも、実行できていないのが実状である。「父母を敬え」と言われて「そうだなー」と思えればいいのだが、「何で、あんな親を敬わなー、あかんのや」「ますます気むずかしく、ガンコになるし、小言は多いし、あんな親にはなりたくないものだ」と思っている人が案外多いのではないだろうか。しかし、この戒めは全ての親に対して言われていることで、こんな親は敬って、あんな親は敬わなくて良い、とは言っていない。何故、どんな親でも敬わねばならないのか。

確かに親の生き方、育て方に問題があるだろう。しかし、それだけではない。多くは自分自身の中に問題がある。私たちが「父母を敬う」ことを困難にしている最大の原因とは、父母ではなく、私達の罪(神に背を向け、神を敬わないこと)である。自分がこうなったのは親の責任だ、チャンと育ててくれなかったから、愛情を注いでくれなかったからだと、親のせいにすることはいくらでもできるだろう。しかし、問題は自分の中にある。神に背を向け、神を敬わないことである。

私達は皆、自分が不十分な罪多き者だということを知る必要がある。その時、親も又、様々な弱さを持ち、罪をにない、苦悩している一人の人間である、ということを知ることになる。それを知ることは父母を敬うことの大きな第一歩となる。私たちは悲しいかな、それを自分自身で知ることは出来ない。これらのことを知らせ、正しい道へと導いてくれるのは、天から降り、人となられた神の御子キリストである。キリストは苦悩するすべての人の罪を御自分が負い、身代わりとなって十字架に付かれたのである。このキリストのカードをもらいました。そこには「いつも喜んでいなさい」と書いてありました。“そんなことならかんたんよ！”当時の私は、そう思いました。

中学校になる頃、私は家族と共に田辺を離れ、関東に移りました。学校はミッションスクールでしたから、そこでまた、この聖句を目にしました。生意気ざかりの私は、「いつも喜んでいるなんて、馬鹿みたい・・・。」と思ったりもしました。額にしわを寄せて、人生を悩む人をかっこいい、と思っていたのかも知れません。

それから何十年も経ちました。私も、それなりの試練や経験を与えられ、ある日ふと、あの言葉を思い出したのです。“いつも喜んでいなさい”ということは、辛い時でも、苦しい時でも、悲しい時でも喜んでいなさいということなのですか？これは、ハードルが高いなぁ・・・。その頃Ｓ子ちゃんが私の住所を探し出して連絡をくれました。懐かしいＳ子ちゃんとまた交流が始まりました。彼女は若い時に大病をされ、幾度も手術をし、入退院をされてきたことを知りました。そして今は病いを抱えつつ、教会員として活躍されているのです。驚いたことに、彼女はどんなに辛い時でも激痛のさいちゅうでも、明るいのです。電話でもメールでも、必ず笑ってしまう一言を入れてきます。医師のユーモラスな言葉や看護師さんの優しさも知らせてくれます。そして私の体調を気遣ってくれるのです。彼女は長い闘病生活から、多くのことを学ばれなのでしょう、そこで『いつも喜んでいる』強さも、培われたのでしょう。私はＳ子ちゃんと出逢えたこと、この聖句を思い出したことに、深く感謝しています。

ウィッシュ

光に照らされる時、だれもが神を敬い、父母を敬う思いを与えられるのである。

創世記には人間は神のかたちに創造された、とある。つまり、人間は親を慕い、親を敬い、親を大切にすることが、心に刻まれている、ということだ。なのにそれとは裏腹に、なぜこんなにも多くに人が親を罵り、親を軽んじるのだろうか。私たちに両親の非を裁くことが出きるのか。何故、こんな者に生んだのか、両親を恨み、神を呪う人もいるかもしれません。そうしたい人はそうすればいい。わたしもそうした。

誰も意味無く生まれてくる人は一人もいない。神の御心の内に生まれてくる。神のかたちに、神に愛されて生まれてくる。しかし、悲しいかなこの世は神を信じない罪の世です。その中で私達は皆、罪の影響を受け、罪に苦しみます。本来あるべき姿を慕いながらも、かけ離れていく自分の姿を知るのです。まじめに良い人間になろうと努力する人もいるでしょうし、いや人間てこんなもんだ、とあきらめ開き直る人もいるでしょう。

しかし、依然として私達の中の罪は消えることはありません。罪は私達に様々な不幸をもたらします。両親を恨み、責任を転嫁し、裁き、赦さない、赦せない、それは隣人にも及び、私達に惨めな人生を送らせるのです。

神はそんなわたしたちを深く憐れんで、御子イエス・キリストをこの世に遣わされたのです。完全な神として、また完全な罪のない人間としてイエス・キリストはこの世に来られたのです。そしてキリストはその生涯を通して、私達が本来、神の前にあるべき姿を示し、また誰もがそうなれるように道を作ってくださいました。

キリストは私達の一切の罪を背負い、自らの命と引き替えに、十字架で私達の罪の赦しを成し遂げて下さいました。私たちが罪多き欠けだらけの者でありながらも、また不十分な者であるにもかかわらず、このキリストへの信仰によって、実にそのままで受け入れられ、赦され、愛されていることを知るのです。

そこから「父母を敬う」思いが徐々に湧き上がってくるのです。隣人への愛が生まれてくるのです。まず、私達は神の前に罪人である自分を知り、キリストにおける神の赦しを信じる信仰を与えられねばなりません。これは誰もが無条件で受けることのできるものです。そこには何の差別もありません。神の恵みの賜物です。

以前、ヴォーリズの本を読み心が篤くなった。今、Ｓ子ちゃんを読み心が温かくなった。主に感謝。次号四二号は八月三一日です。

【出エジプト記】二十：十二　あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。（聖書）

五月、六月は母の日、父の日が続いている。これにちなんでこの言葉を心にとめたい。これは有名なモーセの「十戒」の一節である。この十戒は、今から実に三千年以上前に石版に記されたもので、モーセが神から与えられ、イスラエルの民に告げたものである。